スティルネルの概観

大平智円

スティルネルの生涯が不幸であったと語る時、我々はその不幸を彼の生涯のどこに嗅ぎつけるであろうか。彼の晩年の失敗と負債に追われた生活、孤独の中で寂しく生涯を閉じたその姿からであろうか。もしそうだとすれば、我々は彼の「唯一者」をどこに見出すことが出来ようか。

書物上だけの「唯一者」をかい間みるには、彼の「唯一者」はあまりにも衝撃的である。「唯一者」の難渋さにもかゝわらず、我々は一度彼を知ったなら彼から逃がれる事は出来ない。あたかも呪文のごとく我々を虜にして離すことがない。

「世界との私の交通、それは何を目途するのであるか。私は世界を享受することを望むのだ。ゆえにこそ、それは私の所有であらねばならず、ゆえにこそ私はそれを獲得することを望むのだ。」

すべての事柄が、それ故私の事柄が創造的無から発する自己享受の対象であるという彼の「唯一者」を、それはまさしく自己の生涯をロウソクの燃えつきるような、自らを燃焼し尽し、その燃焼し尽す中で自らを享受するというそのような姿をどこに見出す事が出来るのか。

我々は「唯一者」を、あるべき理想の姿として見てゆくならばその姿の把握は色彩を失いはしまいか。自己の内部に息ずくものとしてエゴイズに返り見られても、それはほとんど絶望に近き相克の中で消耗してゆくであろう。あるべき理想の姿としてではなく、現実のまっただ中に身を置いた生きた個人として、欲してやまざる人間として、矛盾を矛盾として背負いその境遇を自らの運命として荷なっていく姿勢の中に「唯一者」をみてゆかねばならない。

自己の一生を必死に生き続けた、たとえそれが不幸で悲惨で泥まみれた生涯であったとしても、又その姿がパンチョであろうとも、彼が生き続けたその限りに於ける彼の姿を、「唯一者」の姿を私は追ってみたいのである。

×

ヨハン・カスパァ・シュミット（Johann Kasper Schmidt 1806〜1856）ーペンネームをマックス・スティルネルーは一八〇六年ドイツ中央部ババリアのバイロイトという小都で生れた。彼が生まれた時代、

即ち一九世紀の初頭は、市民社会の誕生の時代でもあった。フランス革命は全ヨーロッパを揺り動かし身分制度から階級社会へと発展してゆく時代の落し子であり、拡大していく世界との斗争の前ぶれであった。

彼が生まれたバイロイトは当時プロシャの支配下にあったがその年の十一月にはナポレオンの支配に移り、一八〇九年にはオーストリアの支配下になった。統治者の占領者の急速な変遷、自由という事が特定の国家によって保証されることのない、自らが自らの力に於いて自由を把えうるという限りの自由しか彼の周囲にはなかった。

彼の父は吹奏楽器、特にフルートの製作師であり、彼の誕生後半年たらずで喀血で他界している。彼の母は精神病者で一度は彼の母の看病の為退学した事もあり又その母を抱えてベルリンの町を転々としている。彼の父の死後二年後彼の母は宮廷薬剤師ルドリッヒ・バラーシコチットと再婚している。そして又彼も新しい父の下に引き取られてた。

善良な真面目な学生シュミットは高等学校時代、彼の学校の校長ゲオルグ・アンドレアス・ガブラー（ヘーゲルの弟子）から教を受け校長の影響が強くもあったろう一八二六年二〇才のときベルリン大学哲学科に入学した。当時ベルリン大学の教授連にはハインリッヒ・リヒター、シュライエルマッハ、ヘーゲル等が名を連ね、とりわけ思想界に於けるヘーゲルの位置は圧倒的であった。

彼は二度大学を退学している。一度目は一八三二年そして一八三四年再び大学にもどったが一八三四年再び退学している。

当時の彼の研究プランをみてみると「芸術の割期時代」「古代ドイツ人の神話学」「文学史」「プロシャ史」「古代ギリシャ悲劇」の講義を聴こうとしていたらしいが、彼の病弱な体質と慢性の病気はそれをはばんだ。

一八三三年頃には、立法論批判、アリストテレスの哲学、プラトンの共和国論等を聴講、研究している。この研究プランをみる時、神学、芸術、歴史に対する彼の思想の方向性並びにその思想の発生をうかがう事が出来よう。

一八三四年三月彼はベルリン大学を退学し、その年の六月講師となる試験を受ける為、王室科学委員会に受験申請を提出した。この試験のとき彼は二つの論文を作成し発表した。この論文は彼の独特な思想と世界観の最初の発表であり、特に学則に関する論文は興味あるものであった。

彼はこの試験に及第し一八三五年有名なベルリンの王室実業学校の教員となりラテン語を教えた。

一八三七年彼は学生時代の下宿屋の娘アグネス・クラ

ラ・クニグンデ・ブルッと結婚したが彼女は早産の為逝去し、彼は再び読書と執筆に懸命になった。一八三九年にたってグロピウス夫人の「私立高等女子教育学院」に就職し、ここで五年間講義した。

彼の教師としてのあり方は、研究熱心と静かな叮寧な性格は娘達の敬愛の的であったという。そして恐らくこの期間が彼の一番落ち着いた静かな生活であったろう。

一八四一年頃ベルリンの街では夜になると奇妙な連中が酒場で気炎をあげている姿が散見されるようになった。この奇妙な連中とはボン大学を追い出された若い教授ブルノー　バウアーを中心として若いインテリ仲間、特に思想的に、政治的に同類であった連中、バウアー兄弟、エンゲルス、マルクス等、その他才能のある優れた人々、フォィエルバッハの「キリスト教の本質」をヘーゲル批判の第一歩として共有している急進的思想を開架させようとしていた連中であった。

彼らは夜になるとweinstubeに集い、徹夜して、酒を飲みタバコの煙の充満する酒場で、情熱をもって世間について語りあった。

私には想像出来る。時代を一身に背負っていると信じ、自分達の活動の中から新しい時代への息吹きが開始されていくだろうと確信している輩の、充実した眼をギラギラ輝かせながら煙のくすぶる酒場で語り明かしている姿を。

果しなく続く議論のその場から少し離れ、片すみに一人静かに落ちついた物腰をもって、彼らの議論を聞いているシュミットを我々は発見できるだろう。彼は論文をカール・マルクスの主宰していた「ライニッシュ・ツアイシング」やルドヴィグ・ブルの「モナーツシュリフト」紙に発表し、知名人になっており又その酒場に集う連中も彼を天才的思想家として認めていた。そして一八四五年に発表した「唯一者とその所有」は一躍彼をして有名にした。

この期間ほど彼にとって豊かな時期はなかった。彼は思想家としての名誉と恋人をもつことができたから。

彼はその居酒屋でマリー・デーンハルトを知るようになった。彼女は酒場に集る一人であり、自由を解放された女性を理想としている女性であった。彼女は小綺麗で粋な女性であり、学識もあったらしいが、どちらかというと皮相で浅薄で乾燥した味のない女性であったという。シュミットはこのマリー・デーンハルトに「唯一者とその所有」を捧げた。彼は彼女の愛を得る事が出来た。

『愛する者とは、私にとって愛せらるべき対象なのだ。その者は、私がその者を愛するから若しくは私がそれを

愛することによって、私の愛の対象であるのではなく、愛それ自体の対象であるのだ」（唯一者とその所有）

しかしこの幸せは永くは続かなかった。

幸いにもこの妻は裕福な家庭の娘であったので、持参金によって彼らは一時裕かな生活を送る事が出来たが、彼は教職を辞めたのでその金もまたゝく間に消え生活は急激に下降した。彼はこの物質的窮乏から脱しようとし、英仏の経済学者の書物の翻訳を始めたが、ほとんど収入がなくついに翻訳を放棄した。その后搾乳場経営の事業に手を出したが失敗し、とうとう一文無しになってしまった。あげくの果ては彼は「ヴォスのカゼット」紙上に彼の責任の名において借入しようと公募したが、誰も応ずるものもなく、終いには、負債の為二度迄投獄の憂目にあった。妻は彼女の資金を浪費し尽したことを酷く難詰した。そして彼らはほとんど実生活に於て素人であり、経済的に無能力者であった。この様な中で二人の愛は冷えきってゆき妻は彼から去った。

有能な思想家スティルナーは、実生活ではほとんど子供同然であり、それ故物質的貧困と生活の貧困の中で寂しく一八五六年五月五〇才の生涯を閉じたのである。

×

シュティルネリアン辻潤はシュティルネルをこう語っている。「社会的に見たならば彼の一生は、実に悲惨なものであったと云わなければなりません。しかし彼の哲学を奉ずる者が悉く、彼の如き生涯を送らなければならないというような理窟はまさか立ちはしないでしょう。」

「彼の哲学を奉ずる者がことごとく彼の如き生涯を送らなければならないというような」という辻潤が同様な生涯を、市井を放浪し、全く生活無能力者として、上落合の宿でシラミだらけのまゝ乞食のように淋しくこの世を去っていった事は全くもって皮肉である。

だがしかし彼らがいわゆる豊かな生活の中で逝去していくよりは、貧困の中で自らの生涯を閉じていった事は何か親しみを覚えるというのはどういう事であろうか。

一人間なるものとは要するに一個の理想にすぎず、類とは単に一つの思惟されたものにすぎないのだ。一個の人間であるとは、人間なるものの理想を実現する謂いではなく、自己自身を、個体を表現しているのだ。」（唯一者とその所有）

ヘーゲル左派が政治的活動に走るのに対し、彼はそれから自由である。政治的活動に参加する事で自由であるのではなく、それから免がれている事で彼は自由である。彼にとってあるべき姿、理想の姿を現実化するということで自己自身を表現するのではなく、現実そのものを、

彼が対象を見究める限りに於いて対象を享受、それ故自己享受をかちとる事が自分の自由な働きを及ぼし得るところの享受である。

政治的行動、理想といったものは自己を実現するどころかそのものが自己を束縛し、自己を実現することから離れさせるものとして彼に映る。

「所有とは、私がこれを無条件的に占有するときのみ、私の所有なのであって、ただ無条件的自我としての私のみが所有を有するのであり、また一つの愛情の関係を結び、自由なとりひきをいとなむのだ。」（同上）

所有とは、ただ対象を自己のもとにとどめ置く事ではない、つまり自分の意志に対象が屈服しているという関係ではないだろう。対象そのものが意識をもち、その対象が一つの力をもって自己と関係しようとする時、自己が又一つのまなざしをもって対象に関係せんとする自由な関係の中で相互に享受できる関係として定立し得る時、所有するという事へ通ずるものではないであろうか。

しかしこの事は困難である。対象が生きた存在であり、意識をもちすべてを眺めているというのは、条件を要求しざるを得ない。個人は対象が本質としている限定性と又無限性の中に拒否されるか埋没するかでしかない、さめた意識はさめた関係なのである。

シュティルネルは愛を所有したけれど、常に愛を所有した訳ではない。物質を所有したけど、常に物質を所有した訳ではない。

愛の対象が、物質がもつその既成性と限定性の中で破滅するか拒否されるかは一度は踏まれなければならぬ過程である。

実は相手を克服させるか、自己が崩壊するかの血みどろの斗いが要請されているのだ。享受とは自己燃焼であり、自らを燃しきることをもってしか換えることができない。

創造的無の前に我々は立たされてあるのだ。生への情熱的な働きかけ、それが唯一者たる者の姿であるであろう。

この姿こそ、シュティルネルを、辻潤を、悲惨の中で自らを閉じていく姿を了解させてくれるものではなかろうか。現実を肯定して大往生するよりは、否定しきっていくことでしか自己を置くことの出来ぬ、そのことで自己を実現する他ないことこそ、ふさわしいと思えるのである。

無残な女の青春

ハ　ギ　シ　ン

最近続けて読んだ本が、偶然にも女性の書いたものばかりだった。山崎朋子の『サンダカン八番娼館』、平林たい子の『宮本百合子』、有吉佐和子の『恍惚の人』、そして金子ふみ子の『何が私をかうさせたか』である。

前記三書はそれぞれ有意義な力作だが、商業紙や週刊誌で紹介されているのでここでは省く。金子ふみ子の自伝は、戦前の春秋社版を黒色戦線社が複刻したものだ。

一九二六年七月二七日、ふみ子は栃木監獄の鉄窓に首をくくり、二二才でこの世を去った。……

彼女はグウタラな両親のもとに無籍者として育った。小学校にも満足に通えなかった。父は母の妹と駈落ちしふみ子は母とドン底生活を過した。それから母の三番目の男、小林の郷里山梨に三人は行った。薪小屋の二畳が彼らの住いとなり、小林は炭焼き、母は裁縫に精を出した。ふみ子の最大の幸せは自然の懐ろに抱かれた事であった。結局また男と別れて母の実家のせわになり、母は製糸場へ出稼ぎに行く。そして母は、ふみ子を置いて四番目の男の後妻になった。やがてふみ子は、朝鮮からきた祖母に引取られて海を渡った。だが高等小学校も中退させられ、女中同然に酷き使われ、しかも手ひどく虐待された。彼女は死を図った事もあった。

数え年一六になって、彼女は甲州の家に追帰された。初めの父につれられて浜松で暮すが、居たたまれずに彼女は東京へ飛び出した。新聞店に住込んで家事労働しながら英語と数学を習いに行き、夕刊を売りに立った。

売場の近くには救世軍の伝道隊や、演説しながらパンフを売る「労働社」の一団がいた。のちに彼女はその社会主義者の「仲間」になるが、彼女に初めにパンフを渡した男が、私にも因縁のある高尾平兵衛であった。

所で、ふみ子は新聞店の重労働に耐えきれず、立売りで知りあった救世軍を頼って、粉石鹸の露店売りや行商を始めた。三度に一度のメシも食いかねる生活だった。下宿を追われ何度か女中暮ししたすえ、日比谷の小料理屋「社会主義おでん」で働くようになる。この間、彼女は何人かの男を知るが、やがて朴烈と愛しあい同棲するようになった。朝鮮独立運動は民族解放運動につながるものではないという認識で彼らは一致した。幼い頃から彼女は資本主義制度と家族制度の恐しさ、政治の醜さを

肌身で感じとった。学んだ理論は体験を裏付けるものだった。そして革命運動に投ずるようになるのである。

彼女の獄中手記のあらすじは以上である。……

複刻版は、ふみ子の六七首の歌、望月桂画伯の朴烈・ふみ子の肖像、婦人公論の特集と自由連合新聞の縮写を加えた、装ていも豪華なものである。貴重な資料であり若い世代へは励ましとなり、古い世代へは反省を求めている。（四六判四五八頁箱入、定価二千円ウニタ扱い）

野火

自由民権運動と喜多方事件

福島県喜多方市で黒旗の孤塁を守って頑強に戦っている新明君から、萩原君にまわしてくれと、喜多方事件九十周年記念の前記パンフレットを送って来た。

明治維新後の天皇中心的専政政府に対して、ルソーやスペンサーの政治理論を学んだ者たち、西洋の革命思想に触れた若い知識人によって、全国的な民権運動が起ったのが一八七四年から一八八九年（明治7－22）のことであって、没落士族、中小資本家、地主、農民などの中から広汎に自由平等の要求が起った。福島では喜多方で一八七八年（明治11）に愛身社が設立されて（自治自衛の気象を養ない、時務を討議し、広く社会の公益をはかるべき」だとした、そして一八八二年（明治15）に板垣退助、後藤象二郎、大井憲太郎らの自由党が出来ると河野広中を中心として、これに加盟した。会津三方道路の問題で県令三島の民意無視に抗議して起ったのが喜多方事件である。「自由の公敵たる専政政府を倒し公議政体をつく」ろうとして盟約を結び弾圧に抗した。喜多方の人びとは今もこの事件を「喜多方市の誇り」としている。

×

社会革命運動・第3号

ＳＲＦ（社会革命戦線）の機関紙である。実に鋭いものを感じさせる。人為的な組織（人為的でない組織があるだろうか？）に反対する人々に対して「我々の建設しつつある組織は、無政府革命実現のために合意し、力をあわせ、仕事を分担していくため、当然、権力もなければ命令もなく、相互の思想的同意性を根拠とした信頼関係と、自己の内発性、必然性とが結合された、責任の明確な関係・構造である。協力もなく、準備もなく、孤立したままで個人的に行動すること、あるいはしようとす

ることは、自ら無力であることを宣言し、その努力を効果のない行動に終らせることに等しい」と言っていることには誰にでも首肯できよう。肉体が有機的な組織であるように、群居動物である人間が分業的に結合しようとすることは当然であるが、組織という言葉が今まで権力主義者に乱用され、組織といえば命令と服従の関係にとられやすいことと、また人間自体が持ついろいろな欠点や思想的レベルなどが、組織集団に拡大されやすいことを考慮して組織し運営する必要があるだろう。

大衆についても正しく捕えていると思う。しかし全体にわたって尖鋭さを感じさせるだけに、僕のような雑種的アナルシストは、どのように突込まれねばならないかと思うのだ。お互に批判し合い、突込み合うのは良いがそれを質問といった形式にしたらどうかと考える。そうすればお互にもっと理論的な展開もできるのではないだろうか。どのグループの中にも、本当に自分を成長させねばならないと考えている人たちがいるだろうから。老人は気が弱くなっていて孫共が喧嘩腰になるとハラハラしてしまう。

SRFでは12月3日（日）pm1・30から京都府婦人センターで無政府集会を開く。（連絡先大阪東川郵便局私書箱31号社会教育研究会）

×

自由連合紙

向井君によって創刊された自由連合も廃刊することになったが、向井君もやれるだけやったのだし、やる気がなくなったらやめる外はあるまい。だがこれだけでおしまいという訳ではない。続く者も出るだろう。向井君もこりたわけでもないだろう。

×

望月百合子さんから

・・・先日（九月二十三日）甲府に宮下太吉の墓碑が建ちました。甲府の浅川さんという仏文学出の若い人が甲府の雑誌に太吉の墓を建てたいという短文を出したのが、丁度二年前の大逆事件研究会の席上で私が、甲府の後輩の人々の手で建墓するつもり、と言ったのと同じ頃でした。さっそく浅川さんに、早くその運動を起すよう頼み、いく度か私も甲府へ行きました。甲府の文学活動をしている人々、文化運動をしている人々、革新的思想の人々に広く呼びかけて、昨年木の墓標を立てましたが木では長もちしないので今年石の墓標にしたわけです。碑面には啄木の詩の一部「我にはいつでも起つことを得る準備あり」を彫りつけました。全く多くの人々の小さな金額の協力によって出来た墓碑で、その意味は深いと

思います。

今度は私たちアナーキズムの大先輩で、しかも地味な努力を積み重ね、多くの同志によい影響を与えてくれた渡辺政太郎夫妻の墓碑を郷里の丘の上に建てたいと念願しています。この夫妻はあまり地味な生き方だったために、ほとんどの人がその名さえ知らないようです。

死んだら灰にして川にでも海にでも捨てろと自分のことは思っている私が、大業をなし遂げながら、人々に忘られてゆく人々が残念で、墓を建てたいと思うのですから、まったく自分ながらおかしいのです。

宮下太吉の建墓のとき、リベルテールの仲間の小島泰彦さんに会いました。・・・

×

静岡県MO君から

・・・ボルの運動がきたないことは自明であって、それらに対して日常性のというか、なれ合い抜きの批判は批判として保持し、弾力性ある日常的な運動が大切だと痛感している今日この頃です。そういう意味で、いささか螢光灯ですが、リベルテール7月号の野火の島哲平氏の文章は参考になりました。書斉派と行動派の憎しみあい、たがいのレッテルのはり合いなど、笑い飛ばしてのアナーキストの多様性への意向は、当地での僕自身の日常性（多様性）による柔軟な運動の展開の決定的な遅れに対する警告叱正でもありました

他人様のかかげるスローガンに一喜一憂してデマゴギー的盲動に終始する党派的反動分子（いささかレッテル気味ですが他に言いようがないでしょう）には被支配者の思想などわかるはずもないと思います。

特に「政治的かけ引きによる沖縄返還に徒党を組んで阻止や反対を叫んだところで政治屋に利用されるだけではないか。私にとって返還日に休日がもらえることの方がもっと大切なはずだ。私には渇望していることがありその渇望をいかに生活の中に展開し、充実させることが重大なのだ。それが個性であり、自由の領域に関することなのだ」は、少々いってビックリしましたが、観念的な他人様の考えた「思想」をとっぱらった実存としての自分を考えると、思いあたるフシばかりです。

×

でいらぼん通信第9号（菅田正昭君）

十月から、島の最古老のひとりである菊地梅吉翁を師として、念願の竹かごづくりを始めた。翁はことし83才青ケ島では三番の高齢者だが、昼間は乳牛一頭、黒牛四頭を飼い、夜は竹かごづくりと、文字どおりとんめていい（東明時？M）夜おそくまで働いておられる。・・・

小中学校の運動会の中距離走に飛入参加・・完走された。八丈島や青ヶ島のかごはやや扁平で横長のものである。むかしは誰でも皆作ったが今は梅吉翁や、池の沢噴気孔で竹の蒸気処理法をうみたした名人向里新作さんを除くと常時作る人はいない。・・・

僕の手には十月十一日現在で十二ヶ所の切傷がある。そして今週中には翁に半分以上手伝ってもらった第一号品が完成する。

×

金子ふみ子獄中手記一何が私をこうさせたか」

萩原君の紹介があるから、これは蛇足である。23才で命を絶ったふみ子の赤裸々な自伝である。階層社会のドン底には今でもこうした運命をたどる人々がいるにちがいない。庶民の生きる姿、そしていためつけられても束の間の喜びを求めながら生きる若い女の感情の動きが、ありのままに描かれている。群馬県伊勢崎市中町和田黒色戦線社、振替宇都宮一一〇一五（大島英三郎）

大島君は次のものも出した、リベルテールで取次ぐ

石川三四郎弁証法的唯物史観の批評　一五〇円

仝　無政府主義とサンジカリズム　一五〇円

仝　訳エリゼ・ルクリュ進化と革命一五〇円

×

ミニコミ市始末記

既報の通り十一月十二日の市は開かれる予定であったが新宿淀橋署の介入によってボシャッた。理由は道交法違反で道路は通行のためにあるのであって、ものを売るには許可がいり、ミニコミセンターの許可願いは却下するとの由。何が何でもミニコミ市は開かせないぞの心構えと見受けられた。センター主催者はこれに代る連絡機関をもつと語ったが当日の広場は通行人が水族館の水槽の魚の群れよろしく右往左往していた。ビラくばりも駄目なのだ。三島由起夫センセイ顔写真入り「憂国忌」を配る青年さえ注意を受けていた。資本主義国では巨大な資本にものを言わせて商売するのはいいが、主義主張は右も左も極端なのは排斥される。とにかく体制にとって不利なのは公害の告発であれ環境破壊に注意をうながすものであれよろしくないとされる。そこで米国資本のハンバーガ屋と三越支店では椅子やワゴンを軒下一様に張りだして売りきくる仕第である。淀橋署を管轄する都の首長みのべ氏はロシアから里帰りした往年の美女岡田嘉子さんに航空券をあげたとかあげないとか。都下で行われた珍妙なこのだん圧はご存知あるまい。全くマンガチックなお話という訳。

（莫空人）

リベルテール　一部　１００円

Le Libertaire　毎月一回１５日発行

昭和47年11月15日発行　Vo，Ⅲ No 12

編集兼発行者　三浦精一

発行所　東京都練馬区大泉学園町２１９０

萩原晋太郎方

リベルテールの会

（振替東京１３３８３０番　三浦精一）